

大学史ニュース

第22号

2022年2月28日 発行

◇日本大学新聞創刊100周年記念展示 …………… 2	◇高梨公之総長と「大学史」…………… 4
◇芸術学部資料館企画展「松原寛と日藝百年」…… 3	◇キャンパスになった軍用地④…………… 6
◇日本法律学校講義録調査（八戸市立図書館）…… 3	



上 日本大学新聞創刊100周年記念展示（日本大学会館2階）
 右 各時代の紙面をもとに制作した展示パネル

日本大学新聞創刊100周年記念展示を開催

令和3（2021）年10月、本学の学生新聞である『日本大学新聞』が創刊100周年を迎えました。これを記念して、各時代の紙面をもとにしたパネル・ポスターを制作して各学部で展示しました。また、日本大学会館2階及び法学部図書館では、パネルとともに各時代に関連する本学関係資料を展示いたしました（日本大学新聞社主催、企画広報部広報課協力）。詳細については次ページをご覧ください。



日本大学新聞創刊100周年記念展示



法学部図書館でのパネル展



商学部図書館でのパネル展（写真：商学部図書館提供）



法学部図書館での実物資料展示（写真：日本大学新聞社提供）

冒頭で紹介した通り、令和3（2021）年10月、日本大学新聞創刊100周年を記念して、各学部でパネル・ポスター展を、日本大学会館2階展示スペースで実物資料を用いた企画展を実施しました。11月末日からは法学部図書館においても実物資料を用いた企画展を実施し、いずれも12月末日まで開催しました。

日本大学新聞は大正10（1921）年10月に創刊し、第二次世界大戦や大学紛争などにより休刊した時期はあったものの、今日まで学生が主体となって紙面を構成してきた学生新聞です。パネル・ポスター展では、時代ごとに特色のある紙面を取り上げ、8枚のパネルで日本大学新聞と本学のあゆみを紹介しました。

日本大学会館2階および法学部図書館では、前述のパネルとともに時代を象徴する本学関係資料を展示しました。日本大学新聞創刊号（複製）や発刊趣意書などの創刊期の資料とともに、学徒出陣関係資料、昭和20年代の入学案内など、学生に関する資料を中心に構成しました。また、新聞社関係資料としては、札幌五輪取材ノート、本学90周年の際に日本大学新聞1000号を記念してつくられた歌「桜の木の下で」の作曲者森田公一（本学校友）の自筆譜などを展示しました。

大学に残る大学史資料は、法人文書などの組織文書が多く、学生生活に関する資料は収集しにくいのが現状です。学生の手でつくられた日本大学新聞には、その当時の学生生活や学外活動など、学生に関する記録が多数含まれています。各時代の紙面構成からは、当時の学生記者がどのような事に関心をもっていたのかもわかるので、大学史を担当する当課にとっても、日本大学新聞は貴重な記録資料といえます。

今後も日本大学新聞社と連携し、本学の歴史や学生生活に関する展示を進めていきたいと思えます。

（松原）

芸術学部資料館企画展「松原寛と日藝百年」

令和3（2021）年10月21日から11月12日まで、芸術学部資料館で企画展「松原寛と日藝百年」が開催されました。松原寛（1892-1957）は芸術学部の草創期を牽引した人物で、今回の企画展では学部創設100年を記念して松原寛の著作、草稿、ノート、日記類が展示されました。詳細な年表とともに松原寛の著作から引用された言葉の数々には、芸術や哲学に対する熱い思いが込められていました。

松原寛は戦後、教職追放を受けて芸術学部から離れることとなりますが、展示されているノートには、昭和22年度芸術学部の学科構成及びその募集人数などが記されていました。その計画は、芸術学部の中に哲学科、理学科、工学科を設置するというもので、松原の構想が芸術の枠組みを超えた拡がりを見せていたことがわかります。

また、芸術学部関係写真100枚が展示されていましたが、写真学科有志の協力で白黒写真をカラーに補色されていました。カラーで再現された戦前期の写真は、当時の学生生活がより鮮明に伝わってきました。

今回の企画展では松原寛に関する実物資料が多数出展されていましたが、今後も芸術学部資料館の御教示を賜るとともに、当課でも芸術学部創設期資料や創設に尽力した松原寛に関する資料情報を収集していきます。今回の展示を企画し、同展についてご解説いただきましたソコロワ山下聖美教授に御礼申し上げます。

（松原）



松原寛と日藝百年（芸術学部資料館）



カラーで再現された芸術学部歴史写真

日本法律学校講義録調査（八戸市立図書館）

令和3（2021）年11月18日～19日、青森県の八戸市立図書館で日本法律学校講義録の撮影を行いました。本誌第16号でも紹介しましたが、八戸市立図書館が所蔵する「八戸青年会文庫」の中には明治期の日本法律学校講義録が含まれています。八戸青年会は本学創立の1日後である明治22（1889）年10月5日に設立された明治期の社会教育団体です。

八戸青年会は明治26（1893）年からは八戸書籍縦覧所の運営委託を受けますが、この書籍縦覧所は八戸市立図書館の前身となります。会員には学生、あるいは校外生が多かったようで、八戸青年会文庫には、私立法律学校の講義録が多数含まれており、この中に本学が所蔵していない明治28年前後の日本法律学校講義録がありました。地域の後進のためにと残された本学の講義録は、約100年後の現在、日本に唯一の現存資料となりました。今日まで保存していただき、さらには撮影のご許可をいただきました八戸市立図書館の皆様にご感謝申し上げます。

（松原）

高梨公之総長と「大学史」—高梨公之関係資料より



高梨公之（昭和30年代）

高梨公之の第7代総長（以下高梨総長）の資料が平成24年6月に当課に寄贈されたことは、本誌第4号でお知らせした通りですが、このたび資料の整理が終わりましたので、その中から、高梨総長の事跡が分かる資料、特に大学史に関するものを紹介します。

その前にまず、高梨総長の経歴について改めて振り返りましょう。

高梨総長は大正4（1915）年に栃木県で出生し、のち東京市に移り住みます。昭和7（1932）年に日本大学予科に入学、その後法文学部法律学科に進学し、昭和13年3月に卒業しました。本学在学中の昭和12年には高等文官試験司法科に合格するなど、学業においても優秀な成績をおさめました。

大学卒業後は教員・研究者の道へと進み、民法（特に家族法）を専門としました。昭和15年6月に本学予科講師、7月に法文学部嘱託となります。昭和22年6月に法文学部教授に昇任、学部内の各種役職を務めた後、昭和35年から43年までは法学部長を務めます。またこの間、評議員、通信教育部長など法学部以外の業務にも携わるようになりました。

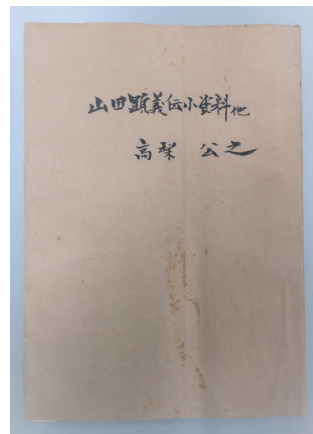
昭和44年から47年までは理事長として大学紛争後の事態収拾に努め、理事長退任後は副総長となります。昭和59年に第7代総長に選出され、戦後最大ともいえる高等教育改革期の総長として日本大学の舵取りを担いました。平成2（1990）年に総長を退任、名誉総長・顧問となります。

これらの経歴からも分かるように、高梨総長は学生時代から本学を退職するまで、常に日本大学と共に歩んできました。

そして、上述のように高梨総長は民法の研究者でした。ゆえに、学祖山田顕義が司法大臣・法律取調委員会委員長として法典編纂に関わっていたこと、民法典論争が展開されていたところに若き法学者たちが山田顕義を巻き込んで日本法律学校を設立したことは、自らの研究との関りにおいても大いに関心があったのでしょうか。高梨総長は昭和40年代頃より大学史に関する執筆活動を開始します。

昭和45年には『日本大学80年記念論文集』に「日本法律学校と五大法律学校」を、昭和48年には『日本法学』38巻3号に「五大法律学校とその実態—明治三〇年代における—」を寄稿しました。高梨総長の調査は次第に学校の歴史だけでなく、創立者の山田顕義にも及びます。昭和49年に「山田顕義伝小資料」を執筆し、以降も山田に関する論考を発表しました。

本学では、昭和50年代より学祖山田顕義の顕彰が本格的に始まります。昭和52年9月には、昭和49年に日本法律学校・法学部が創立されて85周年を迎えたことを記念して法学部前庭に山田顕義胸像が設置されました。また昭和54年9月には、90周年を記念して山口県萩市に「顕義園」が設置されます。資料群には、これらに副総長あるいは法学部教授として関わった高梨総長が当時の記録やメモ（胸像前に設置された「山田顕義先生頌」の石碑の原稿など）をまとめた冊子も残されています。またこの頃、胸像などの設置だけでなく、学祖に関する出版も盛んになりました。昭和53年より広報課を中心に学祖に関する記事が刊行物に掲載されるようになります。広報課の



「山田顕義伝小資料 他」直筆原稿を綴じた冊子

刊行物『桜門春秋』には毎号高梨総長と歴史家による山田顕義や日本法律学校等に関する対談が掲載され、紙面を賑わせました。

昭和59年に高梨公之第7代総長が選出されますが、高梨総長の在任時の平成元年に本学は100周年を迎えます。それに伴い『日本大学百年史』が編纂され、また『山田伯爵家文書』が編集・刊行されます。高梨総長はこれらの事業にも積極的に関わりました。

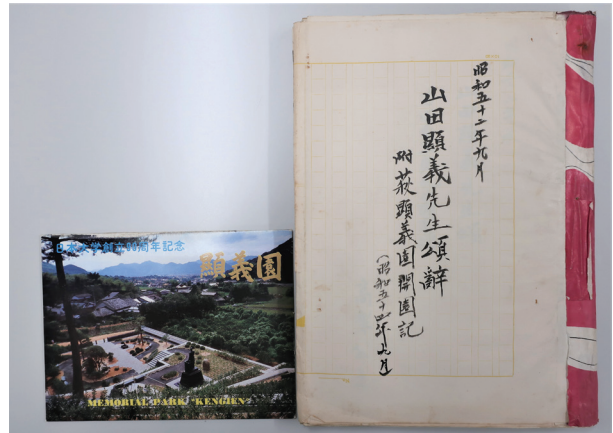
高梨総長は、学祖を中心とする創立期の研究にとどまらず、「現在」の歴史が未来に伝わるようにとの思いを持っていました。それを端的に表すのが、「昭和五十八年九月 日本大学大学院国際関係研究科創設事情」の簿冊でしょう。この1頁目には次のように記されています。

日本大学三島学園国際関係研究科を基礎として大学院国際関係研究科を設置す。その記録の一斑を綴って本集とせり。…(中略)…はなはだ不十分のものなるも、公式の記録に遺らざる若干があらわなり。昭和五十八年九月三十日 高梨公之

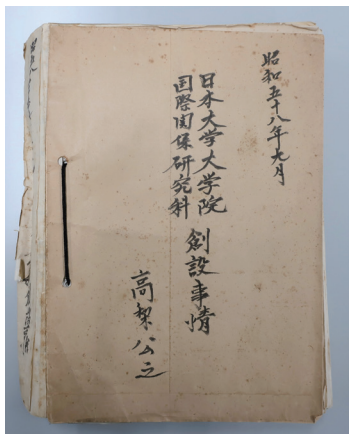
高梨総長は昭和54年4月から59年8月まで(総長に就任するまで)、国際関係学部の初代学部長を務めていました。学部長として研究科の創設に関わる中で入手した資料を後世に残すことが自らの使命と感じていたことが伺えます。

高梨公之関係資料の中には、この他にも高梨総長自身が学生時代～本学教員採用前後に記した日記や、本学の役職者として書いた原稿、自らが総長選に出馬した際の資料など様々なものが含まれています。高梨総長が研究した日本大学の「大学史」と、高梨総長から見えてくる日本大学の「大学史」、2つの側面について知ることができる資料群と言えるでしょう。

(上野平)



「山田顕義先生頌辞 附萩顕義園開園記」冊子と冊子に収められていた絵葉書

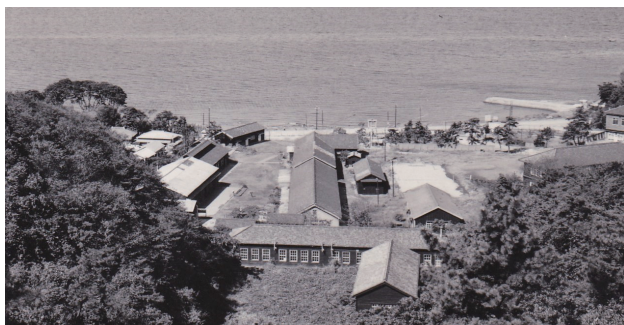


「昭和五十八年九月 日本大学大学院国際関係研究科創設事情」



松岡康毅四十年祭集合写真(昭和38年) 前列右から2人目が高梨

キャンパスになった軍用地④（神奈川県横須賀市）



農学部横須賀校舎（前=北側は馬堀海岸）

本誌第11～13号で「キャンパスになった軍用地」①～③を連載し、軍用地跡を使用している①生産工学部と理工学部船橋校舎、②国際関係学部、③工学部について、隣接する付属校や日本大学以外の施設も含めて紹介しました。これらは、現在も日本大学がキャンパスとして使用していますが、今回は、すでに日本大学の施設は置かれていない、横須賀市馬堀^{まぼり}にあった農学部（現生物資源科学部）の旧キャンパスを取り上げます。

「西南戦争」の終結により内乱の憂いが無くなった明治10年代、陸軍は対外防衛のための要塞整備に着手しました。20年代には要塞砲兵を設け、千葉県国府^{こうのふ}台に幹部練習所を創設。半年足らずで浦賀の海軍屯営跡に移転し、29年に陸軍要塞砲射撃学校と改称しました。明治30（1897）年には馬堀（現横須賀市馬堀海岸4丁目）に新校舎を建設し、31年に移転が完了しました。

「日露戦争」後、陸軍の作戦方針が変更されたことに伴い要塞は整理が進められ、重砲の運用は要塞重砲から野戦重砲・攻城重砲へと重点が変わります。要塞砲射撃学校は、明治41年に重砲兵射撃学校、大正11（1922）年には重砲兵学校へと改称・改組されました。

昭和20（1945）年8月30日、残務処理員を残して、同校は廃止されました。同日、政府は、外地からの引揚者の受け入れの基本方針を決定。10月に浦賀が引揚港の一つに決定されると、神奈川県・陸軍・海軍がそれぞれ収容施設を開設し、上陸した引揚者・復員者が、帰郷や新生活を始める準備をするための一時施設としました。

陸軍は関東上陸支援局を設置して重砲兵学校を馬堀収容所（3,100名収容）、不入斗^{いりやます}の重砲兵連隊駐屯地を横須賀収容所（3,000名収容）として転用。11月には連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）指導の下、主管官庁は厚生省に統一されて、全国に7ヵ所の地方引揚援護局を設置。馬堀収容所は、浦賀引揚援護局管下の馬堀援護所となりました。

昭和22（1947）年5月、日本大学農学部が私立大学として初の水産学科設置が認可され、校地として申請していた陸軍重砲兵学校跡の一部（西側の材料廠や機械工場などの跡地）転用も認められました。引揚援護局や横須賀市から備品なども払い下げられ、6月に開講、同時に農学部予科を藤沢から移転しました（2年生以上は藤沢に残留）。24年2月には、日本大学横須賀高等学校（普通科・水産科）も設置されています。

しかし、陸軍時代の作業場などを転用した教室は、裸

「西南戦争」の終結により内乱の憂いが無く



「横須賀校舎正門」絵はがき（昭和24年）
占領期のためか門柱には英語のプレートも掲げられている



現在の横須賀校舎跡地付近

電球が下るのみで薄暗く、ガラスが満足に入っていない窓からは風雨が吹き込み、実験・実習の施設ありませんでした。学生の要望もあり東京移転が検討され、農学部と合併が決まった東京獣医畜産大学の世田谷区下馬の校舎（現三軒茶屋キャンパス）に昭和26年度から移転、横須賀高等学校は日本大学藤沢高等学校に合併されました。横須賀の施設と土地の大部分は、大蔵省関東財務局に返還しました。

残した施設には、新たに農獣医学部臨海実験場を設置、その後、横須賀臨海実験所と改称。実習や実験・研究に使用した馬堀海岸は、昭和40年代になって埋め立てられ、海岸線は4～500m北に移動しています。52年1月横須賀臨海実験所は廃止され、その

役目は49年2月設置の、下田臨海実験所に引き継がれました。現在、校地の跡は住宅地となっています。

第一中隊兵舎や下士官候補者隊などが並ぶ重砲兵学校東側は、昭和22年4月、横須賀市が設置した新制中学校11校中の1校、馬堀中学校の校舎として使用されました。26年10月には、馬堀小学校が天津小学校から分離独立し、跡地中央の本部庁舎や第二・第三中隊兵舎などの一郭を使用しました。その後中学校・小学校とも建て直され当時の施設は残っていませんが、小学校の校庭の隅、将校集会所の前庭跡に重砲会が建立した「重砲兵発祥地」碑が建っています。現在、馬堀自然教育園となっている南側の火薬庫跡周辺は、陸軍時代の面影を残しています。

本調査にご協力いただきました、横須賀市立馬堀小学校、同馬堀中学校、同中央図書館郷土資料室、横須賀市自然・人文博物館の関係者に謝意を表します。

(高橋)



現在の馬堀中学校



「重砲兵発祥地」碑（馬堀小学校校地内）



馬堀自然教育園に残る火薬庫跡の一棟

【主要参考文献】

- 農獣医学部年史編纂委員会編『日本大学農獣医学部の歩み』
- 浦賀地域文化振興懇話会編『浦賀港引揚船関連写真資料集』
- 横須賀市編『横須賀市史 別篇 軍事』

